

“The Minister's Black Veil” における 「ヴェール」「笑み」そして「震え」の意味

佐藤千春

1837年、Nathaniel Hawthorne (1804-64) が発表した短篇集*Twice-Told Tales*に収められた作品の一つに“The Minister's Black Veil”がある。物語はコネティカットのミルフォードという小さな村が舞台。ある日の日曜日、村はいつものように平穏でなじみ深い一日の行事から始まる。礼拝の時刻を知らせる寺男の鳴らす鐘の音、長老たちは腰をかがめ通りをやってくる。晴着の子供たちは普段より真面目くさり、大人のもったいぶった歩き方をまねながらも顔を輝かせている。ひとり身の若者たちは着飾った乙女たちを横目使いに眺め、いつも以上に美しく思える彼女たちに賞賛とあこがれの眼差しを送っている。村人に礼拝を告げる鐘の音がやんだ時、それは牧師がこちらにやってくる合図となっている。だが現れた牧師は、驚いたことに口とあごを除き、額から下の顔全体をすっぽりと蔽う二つ折りの黒いクレープ布を身につけていた。そしてその日を境に、彼はこのヴェールを死に至るまで外すことはなかった。

以上が物語のおおよその筋だが、当然ながらこの「ヴェール」がいかなる意味を持つかがテーマの一つとしてとりあげられる。本稿では、この普遍的テーマとも言えるこの問題を中心に、ホーソンの他の作品との関連にもふれながら考察を重ねてみるが、視点を二つに絞って眺めて見ることにする。一つは、このヴェールが、それを身につけている牧師自身にとって何を意味するものであったか、彼の考えはどこにあったのか、これを主人公、フーパー牧師の言葉と行動をたどりながら探り、いま一つは、このヴェールに接し、これを眺める立場にあった会衆たち、つまり村人たちの立場から、その意味するものが何であったか、その効果がどのようなものであったかなど、同じく村人の言動を通し探ってみることにする。その際筆者は、再三にわたり描写されている牧師の「笑み」というものに特に注意

を払い、さらに物語の解釈上、一つのポイントに思われる牧師、会衆双方の「震え」にも注目し、この「笑み」「震え」が持つ意味をからませながら、これが「ヴェール」とどのような関わりがあるかにも焦点をあわせ論を進めて行くことをおことわりしておく。

初めに、物語の進展に合わせ、このヴェールが会衆、すなわち村人たちにどのように受けとめられ、彼らにどのような効果を与えたか、これに関する描写をたどりながら眺めてみよう。それは——「それにしてもフーパー牧師さまは、いったい顔に何をつけておいでなのだろう？」⁽¹⁾という寺男の驚きの声から始まる。以下、描写されている表現をたどれば、astonishment, wonder, amazement, wonder-struckとなり、いずれにしてもすべて初めは単なる驚きにすぎないものであることがわかる。だが、近よってよく見れば「二つ折りのクレープ布」(two folds of crape) にすぎないこのヴェールは、牧師のいつにない装いとして、また彼の日頃の生活ぶりなどから考え合わせ、村人たちの目にはその視覚に映ったもの以上の、何か常軌を逸したものに見えたのであり、同時にそれは牧師自身の変貌にもつながって受けとめられてしまった。「あの方は、お顔を隠されただけで何か恐ろしいものになっておしまいになられた」「私たちの牧師さまは気が狂われてしまったのだ！」⁽²⁾ こうしてヴェールとそれをつけた牧師ともども、それは会衆にとって「何か説明しようのない出来事」として映り、ヴェールももはや単なるクレープ布ではなくなり、「謎めいた印」「牧師と聖書の間には暗い影を投げかけてくるもの」とさえ感じとられてしまったのである。聖職者だけにその「暗い影」は、神への冒瀆、不敬あるいは神聖なものを汚すようなものと関係がありそうな暗示にとらわれて行く。しかもこのヴェールをつけて最初に行った説教は「人知れぬ罪」(secret sin)「あの悲しむべき秘めごと」(those sad mysteries)に関するものだった。すると会衆にとってそのヴェールが、次第に視覚的具體性を持ったものから離れ、ますます何かを象徴するものに見えてくる。そして知らぬうちに――

会衆の一人一人が、この上なく汚れを知らぬ乙女や頑な心根の男までもが、まるでその説教者が恐ろしいヴェールの背後から忍び寄って、自分たちの心に秘めた邪な行為や思いをあばき出してしまったかのように感じた。⁽³⁾

多くの者が思わず固く握りしめていた両の手を開き、胸の上に押しあてる仕草をとる。ホーソンの作品において、胸に秘めごとを持つ者が示す典型的な動きである。⁽⁴⁾

さて、会衆の中に次第に忍びよってくる一抹の不安と怯えは、もちろんこのヴェールから来るものだが、今やそれは単なる物質ではなくなっているため、会衆はその漠とした不安から逃れるため一陣の風が吹いて、このヴェールを吹きとばしてくれることを望む。礼拝後、会衆たちの見せるヴェールをめぐる反応、これはそうすることによって抽象的なもの、謎めいたもの、この場合にはヴェールが投げかける「暗い影」に対し、理屈で理解できる具体的な説明を与えようとするもので、こうすることによって彼らは心に納得を覚えようとする。目に見える範囲のものだけしか見ない、また見ようとしない世俗人一般の示す典型的な反応と言えるであろう。まさに彼らにはsagacious（したり顔の、賢しげな）という表現がぴったり当てはまる。

ともかく会衆にとってヴェールとフーパー牧師自体、いぜんとしてstrange and bewilderedな反応をひき出す存在でしかない。ヴェールが想起させる象徴性を理解できない会衆は、もはやこれを自分たちの理解の範囲を超えたものとして眺め、やがてこの気持はそれを身につけた牧師自身に対する不安、怯え、恐怖へと変わって行き、牧師との接触を避けようとする。理性で解決できないもの、その範囲を超えたもの、あるいはそのような人間に対し人々が下す常套的表現手段は、それを狂気のなせるわざ扱いにすることだ。“The Artist of the Beautiful”中のオーエン（Owen Warland）もまさに同じ扱いを受けている。⁽⁵⁾フーパー牧師の場合、このような扱いは物語中すでに前兆として述べられている。

ヴェールが不可解なもの、謎めいたもの、自分たちの理性、理解を超えたものとなると会衆は、何としてでもその不合理性（つまり自分たちの理解・理屈・常識を超えたもの）を、目に見えるもの、手で触れ、耳で、そして舌で、更に鼻で嗅ぎとれるもの、抽象的に言えば悟性で判断できうる範囲のものに置きかえたり、それとのつながりを結ぶことで、無理に、強引に合理的説明を与えようとする。そうすることが唯一、自分たちの不安を解消してくれるからだ。〈ある若き婦人の葬儀〉の場合がまさにこれにあたる。ホーソンは見事にこれを準備し、作中人物の一人に「牧師さんとあの（亡くなった）娘さんの魂が手をつないで歩いているような気がした」⁽⁶⁾と言わしめている。

ところで、この亡くなった乙女の葬儀にフーパー牧師は立ち会い、別れの祈りも捧げているわけだが、その描写の箇所と、次に同じ村で同じ日の夜行なわれた婚礼の場面とが、作家ホーソンの意図によるものか、それとも出席した会衆たちの目から眺めたという限定で述べられたためか、いずれにしても不思議なほどのつながりがあることに気づく。まず婚礼時の花嫁の冷たい指は、ヴェールをつけた牧師の前に立つと、花婿の「わななく」(tremulous) 手の中で「震え」(quiver) を見せた。そう言えば会衆は、ヴェールをつけた牧師が初めて行った説教の時、その内容が「人知れぬ罪」「あの悲しむべき秘めごと」に関するものだっただけに、まるで牧師がヴェールの背後から自分たちの方へ忍び寄ってきて、それまで心の中に秘めた邪な思いや行為を見つけ出してしまったかのように感じたのだった。それで無意識のうちに彼らは、きつく握りしめていた手のひらを開き胸の上に押しあてる仕草をした。けれども彼らはまだ怯えるほどには至ってはいなかった。ところがこのヴェールの効果はやがて会衆に身ぶるいをさせるほどになって行く。午後の礼拝のあとの葬儀にかかわる場面に注目してみよう。いぜん黒いヴェールで顔を蔽ったままのフーパー牧師が、乙女の亡骸を納めた柩の上にかがんだ時、その亡骸が顔こそ死者の平静を見せていたが、かすかに身ぶるいし、経帷子とモスリンの帽子がすれ合う音がした、というのだ。黒いヴェールは死者さえも怯えさせるものとなってしまった。

そして会衆は、牧師が「この若い乙女にその覚悟があったと信ずるが、ここにいる人たちも、自分も、またおよそ生ある者すべてが、その顔からヴェールを剥ぎとる、あの恐ろしい瞬間のため、その心の準備がありますようにと祈った時、彼の言葉を漠然としか理解できなかったが、人々は身ぶるいしてしまった」⁽⁷⁾ (傍点は筆者による) つまりこの部分は、牧師の方から見れば自分ばかりでなく、人にはすべて例外なく顔にヴェールがついていると言っているわけである。しかもそのヴェールを剥ぎとる恐ろしい瞬間とは、死の瞬間と深いかわりがあるという。おそらくこれは最後の審判のことかも知れない。いずれにしても会衆にこれほどの「震え」を起こさせるヴェール、あるいはこのヴェールを身につけた牧師は、もはや黒いクレープ布きれなどという具体的表現では言いつくしがたいものにまで発展してしまった。そこでホーソンは初めてヴェールにまどわるものとして a cloud⁽⁸⁾ という表現を使用する。単なる二つ折りのクレープ布きれではないのだ。

さて婚礼時の乙女のことには話をもどそう。彼女もまた言いようのない恐

怖にとらわれ、顔は死人のように青ざめてしまう。ために参列者から、数時間前に埋葬した例の娘さんが、結婚するため墓から出てきたのだというささやき声さえひき起こしてしまう。ここに作家ホーソンの意図したことか、それとも参列者の勝手な想像か、ともかくこの二つの出来事、すなわち若い乙女の葬儀、埋葬と、同じく若い娘の結婚とが結び合った形で、つまりまったく無縁とも言えない形で描かれていることに気づく。

さらにヴェールのもたらす「震え」は牧師本人にまで及ぶ。鏡に映った己が姿を見て、牧師はみずから恐怖を覚え、身体中を震わせ、唇は蒼白となり、ワインも口につけないままじゅうたんにこぼし、闇の中に走り去ってしまう。驚くべきことに、この震えは牧師の婚約者エリザベスにまで及ぶ。初め彼女にとってこのヴェールは、ただの二つ折りのクレープ布きれでしかなかった。しかし彼女にとっても、このヴェールはそれだけにとどまるものでなく、そこにはやがて不安と疑惑の雲 (cloud) が入りこんでくる。彼女はヴェールについて牧師から色々と説明をうける。それを聞いたあと、相手を心から愛し、信じている恋人、しかも婚約者であれば問い糺してはならないような言葉を口に出してしまう。ここで問題とされる表現に「罪のない悲しみのしるし」(the type of an innocent sorrow) と「人知れぬ罪の意識」(the consciousness of secret sin) が出てくる。前者の表現がどのような意味を持つものであるかはいずれ明らかにすることにして、後者の表現は再度にわたって作品の中に現れている。それが牧師の過去、あるいは現在における何か秘密の罪の意識を表わしていることは確かであろう。世間の者たちはそう噂しているのである。とすればこれが牧師という聖なる職にありながら、何かそれにふさわしくない言動があったため、深い罪の意識に苦しんでいる、と考えることは容易であろう。端的に言えばエリザベスは、牧師が人間として良心に恥じるような行為があって、その罪悪感からヴェールで顔を隠しているのだ、という世間の噂の方に心がぐらついてしまったのである。恋人を心から信じてはいない表現が彼女の口をついて出てしまう。それゆえ彼女はこれを心のうちで恥ずかしく思い、頬を赤らめてしまうのである。そして彼女の示したこの一連の言動は、次に彼女もまた、ごく普通の人間と同じく、ヴェールに対し恐怖を抱くようになり、これに「震える」という動作をひき起こす見事な伏線となっていることも見のがしてはならない。人間の愛情が決して完べきなものではありえないという、ホーソン独特の冷めた人間観がここには見られる。⁽⁹⁾このようにしてヴェールとこれをつけた牧師は、すべての者たちにとり得

体の知れない恐怖をひき起こす化物になってしまった。だが皮肉なことに、罪に苦悩する魂に対しては恐るべき力を発揮し、人間的な苦悩やすべての暗い感情には共感することができた。死の床にある罪人はフーパー牧師を求め、彼が現われるまでは息をひきとろうとはしなかった。だが牧師がやって来て、最後の慰めの言葉をささやこうとかがみこんだ時、その黒いヴェールが真近にあるのを見て、やはり震えてしまうのであった。

さて牧師は、こうした人々の反応に対し動ずることはない。彼には人間の何たるかが彼なりに理解できており、それを見抜いていたように思われる。ホーソンはこのような彼の理解のしかたを示す象徴的動作（仕草）に「笑み」(smile) という語をもって表わしている。この語（名詞・動詞）が最初に使われているのは、突然ヴェールをつけ始めた牧師に、会衆たちが驚き、けげんそうなどまどった顔つきを示す場面、次は、会衆の代表者たちがヴェールのいわれを問い糺しに出かけて行っただりの場面、そして次が婚約者エリザベスとの対面の場である。彼女が他人の噂ばなしにかこつけ、牧師を疑うような言葉を口に出しても牧師は――

彼はまた笑みさえも浮かべた――いつもヴェールの下のはんやりとした暗い影からかすかな光のまたたきにも似た、あのかわらぬ悲しげな笑みだった。⁽¹⁰⁾

しかもこの「笑み」に必ずと言ってよいほどsad、melancholyという形容詞、faintlyという副詞がついていることにも注目しておきたい。

ここまでのところ筆者は、会衆側から眺めたヴェールとその効果、およびそれをつけた牧師の姿をたどってきた。次には同じくヴェールを中心にするが、牧師がヴェールごしに見た会衆の姿、その反応をホーソンがどのように描いているか等、多少の重複を許していただきたどってみることにしよう。

すでに述べたが、会衆にとってヴェールは、ただの黒いクレープ布きれでしかなく、その反応も単に驚き程度のものでしかなかった。やがてそれが単なる物質で出来たものにとどまらず、謎めいたしるし（象徴）となつて行つた。と同時に、ヴェールの黒い色、それを顔につけるという異常な行為、さらにそれが暗示するものと一緒に、やがてヴェールは牧師と、彼が読み上げる聖書の中にさえ暗い影が落ちているように思われてしまう。だから彼が祈りを捧げる時もヴェールが重く彼の顔の上にとれて

いるのを見て、会衆も、またホーソンもともに、「彼は自分が語りかけている畏れ多い神から顔を隠そうとしたのだろうか？」という疑問を投げかける。読者はいよいよヴェールの持つ謎の深みにつれこまれて行く。このヴェールが会衆に与えた効果はさまざまな形で述べられているが、次の文もヴェールを見た会衆の驚きぶりを表わしたものである。ただここで興味深い点は、このヴェールを眺める視点を変えた表現がとられていることである。それまでは会衆側からヴェール、およびそれを身につけた牧師を眺めてきたが、ここではヴェールをつけた牧師側から会衆の姿をとらえている。この何気ない視点の転換に物語のある重要な意味、その謎を解くような鍵があると筆者には思われる。次の文がそれにあたる。

だがおそらく、この牧師の黒いヴェールが会衆たちにとって恐ろしいものに見えたのとほとんど同じくらい、牧師にとってもこの顔面蒼白となった会衆は恐ろしいものに映ったであろう。⁽¹¹⁾

ヴェールに感じとられる恐怖のため、顔面蒼白になった会衆の姿を強調しようと、視点を変えたのであろうが、しかしこの視点の変化はやがて作品の中で重要な役割を果たすことに気づくであろう。

さて会衆の動揺がいかなるものであれ、フーパー牧師の態度はヴェールのことを除いて何ら変わるところはない。彼はいつものように振舞うが、ヴェールがもはや単なる布きれでないと感じとった会衆には、それを身につけた牧師その人が恐怖の的となってしまった。そのため、以前のように牧師と並んで歩くという名誉を望むものなど誰ひとりいなくなってしまう。こうした会衆たちのあわてふためきを見て、またみずから身につけたヴェールが単に物質で出来た布きれにすぎないと理解している牧師は、会衆たちの日頃からの信仰の薄さを直観し、さらに彼らの心の中に秘めた邪な考えを感じとったに違いない。だからその時牧師にできた事は、黒いヴェールの下から力なく悲しげな「笑み」を浮かべることだったのである。

彼が姿を消す時、その黒いヴェールの下から、悲しげな笑みがかすかに現われ、その口もとに揺らめき、ほんやり輝くのがわかった。⁽¹²⁾

なぜ牧師に会衆の信仰のなさが分かったと言えるのだろうか。それはすでにヴェールを顔につけて行った礼拝の時、牧師は「人知れぬ罪」につい

て説教したわけだが、その折示した会衆たちの無意識の仕草がそれを暗示し、牧師はそれを見てとったに違いないと思われるからである。しかし残念ながら会衆には、牧師のこの「笑み」、そしてそれがなぜ悲しげであるのか理解できていない。いずれにせよ、これはヴェール同様、不可解で、一つの謎のままであり、そこからは「罪とも悲しみとも決めがたい、あいまいな雲がたちのぼっているのである」。それでも会衆にとってヴェールは漠然としながらも次第に、あるものの象徴、またあることの証しとして把えられるようになってくる。それは牧師が、何か重大な罪を犯してしまい、そのため良心が苦しめられ、その罪はあまりにも恐ろしいため、全部は隠しきれないし、またヴェールをつけて、このようにほんやりほめかすより仕方がないのだ、という勝手な説明をつけてしまう。ついにヴェールは罪のしるし、それを暗示する良心の呵責の念として把えられるようになってしまった。その証拠に、牧師は自分でもそのヴェールに対する嫌悪と思われる行動、つまり鏡の前を絶対通らないとか、泉に映る自分の顔にびっくりしないように、身をかがめて水を飲むなどの行動も一切とらなくなってしまうという。今ここで会衆から見たヴェールの受けとめ方をまとめると、次のような表現で変化して行くのがわかる。a black veil (38/17)、two folds of crape (38/18)、This gloomy shade (38/21-22)、this simple piece of crape (39/26)、his awful veil (40/15)、a simple black veil (41/21)、a cloud (43/19)、the symbol of a fearful secret between him and them (45/6-7)、a cloud (48/27)、an ambiguity of sin or sorrow (48/27)、dreadful secret (48/34)⁽¹³⁾ こうしてヴェールは最終的には「彼と世間の者との間にたれ、彼を楽しい友との交わりや女性の愛からも分けへだて、あらゆる牢獄の中でもっとも悲しむべき牢獄、すなわち彼自身の心の中に彼を閉じこめてしまったが、今なおそれは、まるで彼のうす暗い部屋の闇を深めて、永遠の太陽の光から彼をおおい隠そうとするかのように、彼の顔の上に横たわっていた」⁽¹⁴⁾のである。

それにしても牧師は、みずからの顔にヴェールをつけ、それに怯える会衆には、ただ力なく悲しげな「笑み」を浮かべながら、鏡に映った自分の姿を見て、これに怯え逃げ出してしまったのは何故なのだろうか。もう一度ヴェールが何を象徴し、いかなる意味を持つかを考えてみよう。

エリザベスにとって、初めこのヴェールはただの二つ折りのクレープ布きれでしかなかった。それがやがて恐怖のもととして映るようになった時、牧師は次のように言った。それも悲しげに－「君もとうとうそれを感じる

のだね」と。牧師の言葉をたどれば、このヴェールはこの世のもの、この地上だけのもので来世のものではないという。しかもそれはこの世においては取り除くことは出来ないが、いずれ皆がすべてそのヴェールを脱ぎ捨てる時が来るという。だがこのヴェールが脱ぎ捨てられるのをどのような人間も見ることが出来ないという謎めいた言葉が続く。しかも牧師自身このヴェールを身につけながら「ああ！君には私がどんなに孤独か、この黒いヴェールのおかげで一人であることがどんなに恐いものであるかが分かっていないのです。私をこの惨めな暗闇の中に永遠におき去りにしてくれないで下さい」⁽¹⁵⁾と叫ぶ。自分でもこのヴェールの内側にいると、孤独で、恐ろしく、惨めなことは知っている。なのにそこから逃げられもせず、また逃げようとししないのは、つまりヴェールをみずからの手でとり除こうとしないのはなぜか。それは、ある罪を犯したため、それに加える自己裁断か、それとも別の意図があつての意志表示なのか。ここにすでに述べた「人知れぬ罪」の意識と、「罪のない悲しみ」のしるしというテーマが浮上してくる。

まず第一点について考えてみたい。ホーソンはこの作品にA PARABLEという副題をつけ、これにみずから註をつけている。それによると作品の主人公フーパー牧師のモデルとなったジョセフ・ムーディが、若い頃偶然なことから親友を殺してしまい、それに対する恥辱と罪悪感から、以後死ぬまで顔をおおって人に見せなかったという。これには多少違った説もあるが、いずれにしてもこの註をつけたことは、ヴェールを身につけるに至った何らかの動機が確実にあったことを示すものであろう。ただフーパー牧師の場合、ヴェールを身につけた理由は説明されていないし、その意味も曖昧である。しかもこれが単に物質的しるしにとどまらず、それを眺める者に、何か暗い暗示を与えるものであるのなら、読者はかなり想像力を働かせ、このヴェールが持つ意味を探ることが許されるのではないだろうか。先に筆者は、フーパー牧師が初めてヴェールを身につけた日曜の午後、亡くなったある乙女の葬儀に立ち会い、別れの祈りを捧げた場面についてふれた。そこで大胆な考えかもしれないが、この葬儀と牧師の黒いヴェールとは何らかの関係があるのではないかと想像してみよう。その想像の根拠は、その場に居合わせた会衆たちの言葉ややりとりによって裏づけられる。

「お前なぜ後ろを振りかえるんだい？」葬列の中の一人がその妻に

たずねた。「何となく思ったのよ」と彼女は応えた。「牧師さまとあの娘さんの霊が手を取り合っているんじゃないかって」⁽¹⁶⁾

その夜行われた婚礼の場においても同じ状況が見られた。牧師のヴェールに怯える花嫁の青ざめた顔は、あの亡くなった娘さんが結婚のため墓から出てきたというささやきをひき起こしたのだった。そこではっきり言えば、フーパー牧師はエリザベスという婚約者がいながら、亡くなったこの女性への思いがあったのではないかと想像してみる。どれほどの思いであったか、またこの女性の死とどのような関係だったかなど、あてどない想像にはきりが無い。だが少なくとも牧師が、誰にも打ち明けることなく、この女性をひそかに愛していたこと、そしてそのことへの良心の痛み、この程度の想像なら許されるであろう。そしてこの良心の苦しみに苛まれる様子は、まさに*The Scarlet Letter*におけるデイズデール牧師とそっくりである。そう言えばデイズデールとフーパーには似かよった点はいくつか見られる。両者とも教区民から身を離した存在だが、その説教により深い自覚と感動を与える牧師であり、特に罪を犯した者、罪の意識に苦しむ者の気持ちはよくとらえ、またその共感を呼ぶ。人間の墮落といったテーマに関しては、これを雄弁に語ることもできる。デイズデールが見せる、自分の手を無意識に胸にあてる仕草は、まさにフーパーがヴェールを身につけた姿、または顔を人に見られまいとヴェールをたぐりよせる仕草にぴったりである。こうして考えると、本来視覚でとらえられた物質のものでしかないものが、やがて象徴的意味を含み持つようになったという点で、フーパーのヴェールはヘスターの胸につけた緋文字、Aと何ら変わるものではない。Aの文字は、デイズデールの見せる「胸に手をあてる仕草」をひき出す媒体の役割を果たしている。そしてAの文字がそうであったように、フーパーのヴェールにも、いわゆる「人知れぬ罪」を匂わすものがうかがえるのである。ただAの文字とこのヴェールの違いは、前者が、社会という他者からの強制によって身につけたもの（最終的にはヘスター自身の意志によってこれを身につけているもの）だが、後者は最初からフーパー牧師自身の意志によって身につけたもの、という点だけである。

さらにここで考えておかなければならないのは、*The Scarlet Letter*においてもそうだが、ホーソンは罪を犯す過程にはそれほど関心を持っていなかったと思われる点である。*The Scarlet Letter*は周知のように、すでに姦通が終った段階で始まる物語だ。“The Minister's Black Veil”もそうだ。動

機、原因は不明のまま、ある日曜日、突然牧師は黒いヴェールを顔にかけ登場する。とすれば、作家のねらいは、罪あるいはそれを匂わす行為が行われた後の主人公の姿、つまり事にかかわった主人公が、いかにこれを処理して行くか。あるいはその主人公の心理過程とその行動に重きがおかれていると言えるであろう。フーパー牧師の場合、ヴェールを身につけた動機、理由など明らかにしなくとも、これだけで彼が何らかの罪とかかわりを持った、あるいはそれを体験した人物ではないかと想像できる根拠ともなろう。たとえば“*Young Goodman Brown*”におけるブラウンが、直接体験ではないにしても「森へ行く」目的に、ある邪な気持があって出かけて行ったことは想像できるので、その意味での罪の意識を持っていたことは間違いのないであろう。その結果はどうであったか。

ブラウンの森での経験が単なる夢であったか否かは別として、彼はこれを機に、陰気で人間嫌いになり、善の存在を悲観的に否定し、悪の存在を強調する人間となってしまふ。そして、人間らしい愛情と、同胞のいる世界から身を断ち切って、その人生を闇と幻滅のうちに終えてしまふ。こうした主人公の一種の変身は、“*Roger Malvin's Burial*”や“*Egotism ; or, The Bosom-Serpent*”にも見られる展開である。⁽¹⁷⁾だがフーパーの場合は多少異なる。たしかにヴェールは、時を永遠からさえぎっているものだが、彼自身の口から述べられているように、これは「いずれ誰しもがヴェールを脱ぐ時がくる」ものである。つまりこの地上においてのみ身につけているもの、彼に言われると「身につけるべき」ものだという。永遠の世界にあってはヴェールは不要だというのだ。これがいかなるものかは様々に解釈できよう。たとえば、これを神の裁きの前におかれた人間の姿を象徴したものとも解釈できよう。そのいずれの解釈をもっても、結果的にはフーパーが来世に対する信仰を持っていたことの証しにはなろう。ここがブラウンとフーパーの決定的に異なる点である。ブラウンは結果として人間の本性は罪深いものという考えに帰着したが、フーパーは必ずしもそこまでは達していなかったと思われるのである。

そこで第二の点、すなわち、フーパーのヴェールは「人知れぬ罪」とは関係なく、別の意図を表わしたもの、ある意思表示ではなかったかと考える立場をとってみることにしよう。つまりこの立場をとれば、ヴェールは「罪のない悲しみ」のしるし、それを象徴したものとなるであろう。

では「罪のない悲しみ」とは何なのだろうか。筆者はこれを自我・自意識のテーマと考えたい。決してこれは宗教上の罪と言えるものではないが、

ホーソンの他の作品と照らしてみると、一種の罪意識と言えるかも知れない。これは他の作品にあっては、「傲慢」「虚栄心」「うぬぼれ」「自負心」(pride, vanity) といったテーマと重なる。⁽¹⁸⁾ 頑迷なまでの自我意識、これによって生じる悲劇もまた、ホーソンの作品に共通するテーマに数えられよう。今この立場で考えてみたい。

つまりフーパー牧師は、確かに立派な聖職者であったが、自己に大変厳しかったのと同様、他人に対してもかなり厳しい要求水準を持っていた人ではなかったろうか、という考えが浮かぶ。まず彼には教区民たちの欺瞞の生活ぶり、罪深い生き方がわかっていたと想像できる。牧師の目には、教区民一人一人の顔に「人知れぬ罪」の象徴としての黒いヴェールがかかっているのが見えたし、彼らこそ、そのヴェールをかけるに値するとも考えていたのではないか。だが傲慢をきわめる教区民には何らその自覚はない。教区民こそ、身につけてしかるべきはずのヴェールを誰ひとりとしてつけてはいない。それほどまでに教区民の顔に、牧師は傲慢で不遜な表情を読みとったと考えられる。そこで彼らに自覚と反省を促すには、フーパーみずからがヴェールを身につけることによって、それが与える象徴的効果を待つしかない。結果として、フーパーは自分のヴェールごしに教区民を見れば、当然ながらその目には、教区民のすべてがヴェールをつけた状態に見えるわけである。ただここに一つの興味深い現象がおこる。それは、フーパー牧師が教区民の罪の自覚を促すため行ったこの行為に、彼自身もまた己れを怖れるという恐怖にとらわれてしまうのである。これをどう説明したらよいであろうか。もちろん、これはフーパー自身にも何らかの罪の自覚が作用したからであろう。ヴェールは教区民だけでなく、フーパー本人にもその象徴的効果を与えたと考えられる。そこでその心理的動きをたどってみるならば——人知れぬ体験→自覚現象→自己凝視→呵責の念→自己裁断という順序が考えられる。この心理過程は、物語の進展をたどることによって明らかとなる。

再度述べるが、牧師がなぜヴェールを身につけるに至ったか、その理由は最後まで明らかにされてはいない。だが何らかの体験がそのきっかけとなったことは確かであろう。その体験が何であったか、そのようなことはホーソンにとって、さほど重要な意味を持つものではない。作家の関心は、何らかの体験、つまり人知れぬ体験を経て、その後主人公がどのような心理過程をたどるかにあるのだ。そこで動機が何であれ、牧師の自覚がどのようなものだったのか想像してみよう。

ところで“*The Artist of the Beautiful*”という作品がある。ここに登場する主人公、オーエン・ウォーランドに何かしら罪の自覚があったとは考えられない。だが彼には、自分は、自分のやっていることは俗世の人間たちと違うのだ、彼らには自分のやっていることなどまったく理解できないのだ、という意識が強く働いていたことは間違いない。そしてこの強烈な自我意識は、口には出さぬが相手を心の内で軽蔑するという態度をとらせる。この頑迷なまでの自我意識は、やがて傲り高ぶりへと発展して行く。ホーソンはこれに注視する。オーエンが美を追求する芸術家だとすれば、フーパー牧師は真理に身を捧げる、ある意味での芸術家と考えられなくもない。この時点で両者は、共通の線上で結ばれる。確かにオーエンには、自分をとりまく世間の者たちに対する秘めた誇りの意識があった。俗世の者は、自分たちが相手からどのように見られているかを鋭く嗅ぎとればこそ、逆に相手を軽蔑するという攻撃的態度に出るのだ。オーエンが周囲の者から冷笑を受け、軽蔑の眼差しで見られたのは、彼の中に世間を見くだす態度と雰囲気が大衆が嗅ぎとったからだと言えなくもないのである。同じことがフーパー牧師にもあてはまる。フーパーの場合、その人知れぬ体験が何であったか、その解釈はあまりに多く、想像の域を出ることはないであろう。だが筆者は、思いきってその動機を、牧師自身のある自覚によって生じたものと考えたい。その自覚は、牧師の見せる「笑み」とかかわりを持つ。牧師がヴェールごしにその口もとに見せる悲しげな「笑み」、これは牧師自身が抱いていたある意味での罪意識、つまりオーエンにあったかも知れないと思われる傲慢な意識、驕りが自分の中にもあると自覚しながら、会衆たちにはその自覚がないことを見た時の、いわば憐れみの笑みだと考えられるのである。ヴェールはこのように頑迷な傲りの意識を象徴するものだと言えるであろう。だから、これは初め会衆たちを恐れさせ、わななかせていたものだったが、やがてそれが逆に、鏡に映った自分の姿を見た牧師が、身体中を「震わせ」、唇を蒼白にして逃げ出してしまうほどのものになってしまったのである。

こうして傲りの象徴たるヴェールの与える効果は、まず人々に人知れぬ罪と、あの悲しむべき秘めごとについての思いを意識にのぼらせる。人々は、人に語れぬ心に秘めた邪な思いや行為を思い起こし、思わず固く握った手のひらを開け、胸にあてる。二つ折りの黒いクレープ布きれにすぎないヴェールはいぜん、人々に理解されず、また人々の何らかの自覚を持つことなく恐ろしい秘密の象徴としてあり続ける。そして牧師の穏やかな口

もとには、もの悲しげな「笑み」がかすかに見られた。恋人のエリザベスは、初め黒いヴェールを単なる物質としてのクレープ布と考え、何の恐怖も覚えず彼女も「笑み」を浮かべながら牧師と会う。だが牧師の言葉を聞いているうち、突然恐怖に襲われる。その間にも牧師は変わらぬ、あの悲しげな「笑み」を浮かべている。この場面、ホーソンはヴェールの与える効果を、牧師と婚約者との二人の会話をからませ、その中に「笑み」と「震え」の動きを巧みに織りまぜて描いていることに気づく。「君もとうとうそれを感じるのだね」と牧師がエリザベスに言った時、それ、すなわち黒いヴェールの与える恐怖は、愛する女性の信頼さえもくずしてしまう。いったん恐怖にとりつかれた彼女は、身を震わせ、黒いヴェールの持つ謎を見抜くばかりの凝視をわななきながら投げかける。だが牧師は、悲しい気持になりながら、二人を隔てているのはただの物質で出来たしるしにすぎないと考えると、思わず「笑み」をもらすのだった。以後、牧師は鏡の前を通ることも、静かな泉の水面に身をかがめて水を飲むこともしようとしなかった。ここに至って、他人がフーパーのヴェールを見て、恐怖に襲われるのと同じく、フーパーにとっても、自分を凝視すること、つまりヴェールを見ることは恐怖をさそうもの、「震え」を覚えるものによって変わったのであった。こうして――

みずからの姿に震えを覚え、他人には恐怖をまきちらしながら、彼は自分自身の魂の中に陰うつにまさぐり、世の中全体を悲しみの色に染めている媒介物（ヴェール）ごしにこの世を眺め、たえずヴェールの影の中を歩きつづけていた。⁽¹⁹⁾

ヴェールが与えた効果で特筆すべきは、このヴェールを身につけているがゆえ、牧師は罪に苦悩する人々に対し畏怖の念をひき起こす力を持った人間となったことである。暗い想いへの共感で、こうして牧師は人々が健康で喜びに満ちている時には避けられ、臨終の苦しみにある時にはいつも呼び出されるのだった。やがて牧師もまた死を迎える時がやってきた。だが死の床にありながら、フーパーは頑としてヴェールをとろうとはせず、渾身の力をふり絞り、彼は会葬の人々に向かって叫ぶ。なぜ皆さんは私だけを見て震えているのですか？…お互いの顔も見て震えなさい。これまで男たちは私の姿を避け、女たちも私に何の哀れみの気持も示してくれなかったし、子供たちも悲鳴をあげて逃げて行ってしまったが、それはこの私

のヴェールだけのためだったのでしょうか?…周りを見まわしてみますと、ごらんなさい。どの人の顔にも黒いヴェールがかかっているではないですか、と。そしてまた、あの弱々しい、悲しげな「笑み」が、ヴェールの薄闇から閃き、牧師の口もとにただようのであった。物語の中心が牧師にあるのではなく、黒いヴェールの与える効果にあることに異論はなからう。そしてこの黒いヴェールは、一つには「人知れぬ罪」の象徴と考えられるものだが、それ以上に、これが「傲慢のなせる罪」の象徴だと筆者には思われる。この二つの象徴を思わせるテーマが作品の中で互いに交錯しあって描かれ、牧師の見せる「笑み」は、ある時は自虐的に、またある時は加虐的な側面をうかがわせ、ヴェールとこの「笑み」に接した者は、フーパー牧師自身も含め、われ知らず「震え」を見せてしまうのである。

(注)

Textは *The Centenary Edition of The Works of Nathaniel Hawthorne, Volume IX* (Ohio State Univ. Press, 1974) を使用。Works IX と略記する。他の作品に関しても、Works で表示し、それぞれの「巻」ならびにページ数を記しておく。

(1) Works IX, p.37.

(2) Ibid., p.38.

(3) Ibid., p.40.

(4) Ibid., p.40. この仕草は *The Scarlet Letter* における Arthur Dimmesdale や “Egotism ; or, The Bosom-Serpent” での Roderick Elliston が、再三にわたり激しく自分の胸をかきむしる行動と同じであるし、他人の犯した人知れぬ罪悪を洞察する力が具わった Roderick によって、その悪を暴かれた者たちが示す無意識の行為と考えられる。

(5) Works X, p.462. The towns-people had one comprehensive explanation of all these singularities. Owen Warland had gone mad ! How universally efficacious – how satisfactory, too, and soothing to the injured sensibility of narrowness and dullness – is this easy method of accounting for whatever lies beyond the world's most ordinary scope !

フーパー牧師に関しては Our parson has gone mad ! (Works IX, p.38.) や、Something must surely be amiss with Mr. Hooper's intellects. (Ibid., p.41) という言葉がこれにあたる。

(6) Works IX, p.43.

(7) Ibid., p.42. ここでの牧師の言葉は、牧師自身の臨終の場面で彼が述べた I look around me, and, lo! on every visage a Black Veil ! に符合する。

(8) この cloud という語は、作品中 2 箇所あるが、「罪とも悲しみとも決めがたい曖昧な雲が…」(p.48) と述べられているところから、ヴェールが結局は「人知れぬ罪」のしるしなのか「罪のない悲しみ」の象徴なのか、いぜん不明であり、人々にいつその不安と疑惑をかきたてるもの、という意味で用いたと考えられる。

(9) cf “Wakefield” (*Works IX*, p.133)

It is perilous to make a chasm in human affections ; not that they gape so long and wide—but so quickly close again !

(10) *Works IX*, p.46. 「笑み」(smile、名詞および動詞の場合もある)が使用されているのは、作品中A sad smile gleamed faintly from beneath the black veil, and flickered about his mouth, glimmering as he disappeared. (p.41) , the glimmering of a melancholy smile (p.45) , ‘No,’ said she aloud, and smiling, ‘there is nothing terrible in this piece of crape, except that it hides a face which I am always glad to look upon… (p.45) , Mr. Hooper’s smile glimmered faintly. (p.46) , But, even amid his grief, Mr. Hooper smiled to think that only a material emblem had separated him from happiness, … (p.47) , And yet the faint, sad smile, so often there, now seemed to glimmer from its obscurity, and linger on Father Hooper’s lips. (p.52) など。修飾語として使われている形容詞、副詞だけでなく、動詞 (glimmer, flicker) の醸し出す印象も注意すべきであろう。

(11) *Ibid.* , p.39.

(12) *Ibid.* , p.41.

(13) 引用した語句の末尾につけた数字は、作品の頁数と行数。

(14) *Ibid.* , p.50.

(15) *Ibid.* , p.47.

(16) *Ibid.* , p.43.

(17) “Roger Malvin’s Burial” ではReuben Bourneが、真実をDorcasに語らなかったことにより、His one secret thought, became like a chain, binding down his spirit, and, like a serpent, gnawing into his heart; and he was transformed into a sad and downcast, yet irritable man. (*Works X*, p.350) となり、“Egotism” においてはRoderick Ellistonが自分のことだけしか考えない人物、つまり胸の中に蛇を抱いた者へと変身してしまう。

(18) たとえばWakefield, Ethan Brandなどがあげられるが、この自我意識をたどって行けば、Emersonなどを中心とした超絶主義者たちへと行きつくのではないかと思われる。

(19) *Works IX*, p.48.